

魚類

1. 選定・評価方法の概要

伊豆諸島の魚類については八丈島から 98 科 702 種 (Senou et al., 2002) が報告されているが、大島や三宅島など多様性が高いと予想されるにもかかわらず未解明の地域があり、全体像を把握することは困難である。特に汽水・淡水域に限った場合、精度の高い科学的かつ広域的な調査は一度も実施されたことがない。一方、小笠原諸島の魚類相の解明度は比較的高く、全体で 97 科 801 種 (Randall et al., 1997)、汽水・淡水域においても 40 種の魚類が記録されている (吉郷, 2002)。

東京都島しょ部において、魚類がレッドリストの評価対象となるのは今回が初めてである。評価対象は汽水・淡水魚類だけでなく、従来にない試みとして海水魚類にも対象を拡げた。汽水・淡水魚類の選定については、文献上の記録がある種と、2010 年度に実施した現地調査により新たに記録された種を検討対象とした。海水魚類については、文献上の記録がある種のうち、学術的価値の高い固有種またはそれに準ずる種と、IUCN のレッドリスト (Ver. 2010.4) における評価が絶滅危惧 (VU 以上) となっている種を検討対象とした。

その結果、検討対象となった伊豆諸島の汽水・淡水魚類は 25 種、同海水魚類は 12 種、小笠原諸島の汽水・淡水魚類は 33 種、同海水魚類は 15 種となった。

絶滅のおそれの評価は、基本的に定性要件を用い、CR(絶滅危惧 IA 類)と EN(絶滅危惧 IB 類)も区別した。

2. 選定・評価結果の概要

<伊豆諸島>

汽水・淡水魚類は検討対象となった 25 種のうち、レッドリストに掲載された 11 種のいずれもが DD(情報不足)と評価された。この中には環境省レッドリストで CR(絶滅危惧 IA 類)にランクされているカエルハゼが含まれる。この種は 2010 年 7 月に実施した御蔵島での調査において伊豆諸島から初めて記録されたものだが、着底直後の稚魚が 1 個体採集されたのみで、ハゼ科魚類をはじめとする汽水・淡水魚類の生息が予想された同島平清水川での調査は海況が悪く実施できなかったため、DD(情報不足)とした。

伊豆諸島では陸水が発達する島は限られており、御蔵島に比較的規模の大きな河川がみられる。環境は良好であるが、いずれも流程^{*1}は急峻で、海岸線近くで落差の大きな滝となっているため、生息する汽水・淡水魚類の個体群規模は著しく小さいと考えられる。御蔵島以外の島では小規模な河川が見られるが、多くは三面護岸等により流程の大部分が破壊されており、かつてどのような魚類が生息していたのかわからない場合が多い。

海水魚類は検討対象となった 12 種のうち 11 種が留意種となった。いずれも捕獲圧を懸念しての評価であるが、中でも 8 種を占めるサメ類は漁業被害軽減のための駆除対象となっており、ヨゴレについては出現頻度の急速かつ経年的な減少が報告された (堀井ら, 2010)。サメ類のような大型の捕食性魚類の急速な減少は、海洋生態系全体に深刻な影響をもたらす可能性があり、グローバルな視点での資源管理が必要であろう。

<小笠原諸島>

汽水・淡水魚類は検討対象となった 33 種のうち、オオイワシとチョウセンタレクチの 2 種が EX(絶滅)、ハゼ科魚類を中心に 5 種が CR(絶滅危惧 IA 類)となった。固有種であるオガサワラヨシノボリは、環境省第 3 次レッドリストでの評価は CR(絶滅危惧 IA 類)であったが、水質汚染・

汚濁のみられる河川やグッピー・カダヤシ等の外来魚が繁殖する水域においても比較的普通に見られることや、ダム湖では陸封個体群が形成されていることを考慮し、EN(絶滅危惧IB類)とした。なお、2012年8月に発表された環境省第4次レッドリストでは東京都レッドリストと同じEN(絶滅危惧IB類)とされた。

主要河川の発達する父島では、ヤギの尿尿による水質汚染のおそれや植生破壊による表土の流出、降雨量の減少による河口閉塞、外来魚の繁殖といった生息環境の悪化が著しい。特に最大規模の汽水域を持つ八瀬川では、河川改修により河岸が破壊され、さらには河口閉塞によって干満による水交換が十分に行われず、底質のヘドロ化が進んでいる。現在の状況が改善されなければ、CR(絶滅危惧IA類)と評価されたクチサケハゼやミナミサルハゼなどは、比較的近い将来に絶滅する可能性が高い。

海水魚類は検討対象となった15種のうち12種が留意種となった。それらの大部分がサメ・エイ類で、伊豆諸島におけるのと同様、遊漁や漁業、駆除による捕獲圧を懸念してのものだが、ミズタマヤッコのように観賞魚用としての捕獲が懸念されるものも含まれる。タマカイは海水魚類では唯一、CR(絶滅危惧IA類)と評価された。母島近海における全長198cmの成魚の釣獲記録(Randall et al., 1997)に象徴されるように、本来個体数が少ない魚種であることに加えて、常に大型個体が捕獲対象となるため、現在では絶滅に近い状態と考えられる。

小笠原諸島の海域は、人間活動の影響を受けにくく、比較的良好な環境が維持されてきたと思われるが、2003年以降、各地で大規模な白化現象による造礁サンゴの死滅が報告されている(佐々木・鈴木, 2009)。サンゴの死滅は、そこに依存する多くのサンゴ礁性魚類に深刻な影響を与えていると予想されるが、その実態の解明は進んでいない。

水中で自由生活を行い、海域を通じて広く分散する可能性のある魚類については、定量調査はおろか定性調査ですら困難な面が多い。東京都島しょ部においては、特に伊豆諸島の汽水・淡水域の情報が不足しており、魚類相の解明が喫緊の課題であろう。また、絶滅のおそれを適切に評価するためには、言うまでもなく継続調査の体制整備が欠かせない。海域においてはダイバーや遊漁者による情報ネットワークの構築がそのための手段として有効と思われる。さらに、海域・陸水を問わず、公的機関を活用するなどして、出現記録を保証する標本や画像を保管する必要がある。

*1 流程：流れている水の移動する経路

【引用文献】

- 堀井善弘・佐伯拓磨・西村麻理生・神澤識大・田中彰・大泉宏, 2010. 漁業被害の現状と駆除活動による板鰓類資源に与えるインパクト. 日本水産学会誌, 72(6): 267-268.
- Randall, J. E., H. Ida, K. Kato, R. L. Pyle & J. L. Earle, 1997. Annotated checklist of the inshore fishes of the Ogasawara Islands. *National Science Museum Monographs*, (11): i-iv + 1-74, pls. 1-19.
- 佐々木哲朗・鈴木創, 2009. 小笠原諸島聳島列島父島列島における造礁サンゴ類の白化現象(速報). 小笠原自然文化研究所 (<http://www.ogasawara.or.jp/>), 2011年3月4日アクセス.
- Senou, H., G. Shinohara, K. Matsuura, K. Furuse, S. Kato & T. Kikuchi, 2002. Fishes of Hachijo-jima Island, Izu Islands Group, Tokyo, Japan. *Memoirs of the National Science Museum*, (38): 195-237.
- 吉郷英範, 2002. 小笠原諸島父島および母島で確認された陸水性魚類、エビ・カニ類. 比和科学博物館研究報告, (41): 1-30, pls. 1-5.

(瀬能 宏)

ニホンウナギ

Anguilla japonica

ウナギ目
ウナギ科

伊豆諸島

DD

環境省

EN

【形態・生態】

全長1m。体は白い腹面を除きオリーブ色から暗い灰色で、まだら模様はない。背鰭の起点が胸鰭後端と肛門間の中間よりも後ろに位置することで近似種と識別できる。河川や湖沼などの淡水域から汽水域だけでなく、河口に隣接する沿岸域にも生息する。夜行性で、昼間は転石の下などに潜み、夜間、甲殻類など小動物を捕食する。降河回遊を行い、5月に西マリアナ海嶺で産卵、ふ化仔魚は冬に日本沿岸に接岸する。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、北海道、本州、四国、九州、琉球列島；朝鮮半島からベトナム、台湾、フィリピン

【伊豆諸島における生息環境】

神津島、新島、八丈島から目録的に報告されているのみで、標本や信頼できる同定に基づく報告はない。本種は島しょでは河川下流域に隣接する淡水の湿地的環境に生息する傾向が強いが、現在の伊豆諸島ではそうした環境が見られない。

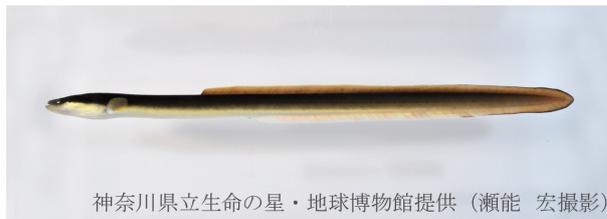
【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河口付近の河川改修や河川の護岸化による生息環境の消失、堰堤など河川横断構造物による溯上・流下阻害が考えられるため、河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

川那部浩哉ら(編・監修), 2005; 黒木真理・塚本勝巳, 2011.

(執筆: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供 (瀬能 宏撮影)

オオウナギ

Anguilla marmorata

ウナギ目
ウナギ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

全長2m。体は白い腹面を除き黄褐色で、黒いまだら模様がある。背鰭の起点が胸鰭後端と肛門間の中間よりも前に位置することで近似種と識別できる。河川の淡水域に生息する。夜行性で、昼間は転石の下などに潜み、夜間、甲殻類など小動物を捕食する。降河回遊を行う。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、本州、九州、琉球列島；インド洋、太平洋

【伊豆諸島における生息環境】

神津島から目録的に報告されているが、標本や信頼できる同定に基づく記録はない。八丈島で採集された全長約175cmの個体の標本(剥製)が東京都水産試験場に保管されている。御蔵島では平清水川や大島分川に多く生息するとされているが、2010年7月に同島で実施した調査では、大島分川の河口(滝壺の中)において多数の稚魚の生息を確認したのみで、同河川上流部において成魚は確認できなかった。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川の護岸化による生息環境の消失、堰堤など河川横断構造物による溯上・降河阻害が考えられるため、河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

川那部浩哉ら(編・監修), 2005; 中坊徹次(編), 2013.

(執筆: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供 (瀬能 宏撮影)

アユ

Plecoglossus altivelis altivelis

サケ目
アユ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長25cm。上唇と下唇に櫛状歯が並ぶことが特徴。体はオリーブ色で、胸鰭上方の体側に黄色い横斑がある。奄美大島と沖縄島(絶滅)には別亜種のリウキュウアユが分布する。河川中流域に生息し、瀬や淵で転石上の付着藻類を櫛状歯を使って削り取って食べる。産卵期は地域によって8月下旬~12月までと幅広く、中流と下流の境界付近の砂礫底の瀬で産卵する。両側回遊魚で、ふ化仔魚は海へ流下し、翌年春から夏にかけて河川へ溯上してくる。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州；朝鮮半島からベトナム、台湾(絶滅)

【伊豆諸島における生息環境】

大島や新島から目録的な報告があるが、標本や信頼できる同定に基づく記録はない。本種の生息には河川中流域や産卵場となる瀬が必要だが、伊豆諸島の陸水域にはそうした環境はない。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川の護岸化による生息環境の消失、堰堤など河川横断構造物による溯上・流下阻害が考えられるため、河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

川那部浩哉ら(編・監修), 2005; 中坊徹次(編), 2013.

(執筆: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供 (瀬能 宏撮影)

クロウミウマ

Hippocampus kuda

トゲウオ目
ヨウジウオ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

尾部を曲げた状態の高さは約17cm。体は焦げ茶色で、小黑点が散在することが多い。地色が黄色い個体もいる。軀幹輪数が11、尾輪数が34～38、頂冠は低く、後方へ傾くことなどが特徴だが、近似種との識別は難しい。内湾の浅い場所や河川汽水域に生息する。プランクトン動物を吸引捕食する。雌が雄の育児嚢に産卵し、雄はふ化後しばらく仔魚を保護する。

【分布の概要】

伊豆諸島、和歌山県以南の本州・四国の太平洋沿岸、琉球列島；オマーン湾以東のインド洋、中・西部太平洋

【伊豆諸島における生息環境】

琉球列島では河口付近の汽水域に出現することの多い種であるが、伊豆諸島では八丈島八重根の海域で記録されているだけである。その出現は偶発的な分散による可能性もあるが、詳細は不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河口付近の河川改修による生息環境の消失が考えられるため、河口から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

Lourie, S. A., et al., 1999; 中坊徹次 (編), 2013.



神奈川県立
生命の星・
地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

(執筆: 瀬能宏)

ヒラスズキ

Lateolabrax latus

スズキ目
スズキ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

体長80cm。体は側扁し、背鰭は2基。体側は銀色で、背部は黒ずむ。体長20cm以下の幼魚では体側背部に細かい黒点を持つ個体が多い。スズキやタイリクスズキに似るが、体高が高く、体柄が太く短いこと、下顎腹面の前方から後方にかけて明瞭な縦列鱗があることで識別される。外洋に面した岩礁性海岸の海岸線付近や河川汽水域に群れで生息し、魚類を食べる。産卵に関する生態は不明だが、高知県での産卵期は仔稚魚の出現状況から1月もしくはその前後と思われる。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州(茨城・能登半島以南)、四国、九州、屋久島、琉球列島(偶発的); 朝鮮半島南部、済州島

【伊豆諸島における生息環境】

大島、新島、三宅島から目録的に報告されているが、標本や信頼できる同定に基づく記録はない。波あたりの強い岩礁性海岸の汀線付近や河口付近に生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河口付近の河川改修による生息環境の消失が考えられる。また、漁業・遊漁による釣獲圧が懸念される。河口から沿岸域にかけての環境保全と、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

下瀬環ら, 2011; 村瀬敦宣ら, 2012.



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

(執筆: 瀬能宏)

ユゴイ

Kuhlia marginata

スズキ目
ユゴイ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

体長18cm。体は銀白色で、体側に黒点や黒い網目模様がある。オオクチユゴイに似るが、尾鰭の上下に黒斑がなく、後縁が黒く縁取られることで識別できる。背鰭、臀鰭の軟条部と尾鰭の上下先端はオレンジ色。河川汽水域から淡水域にかけて生息するが、成魚は大きな河川の渓流域に多い。流れの緩やかな淵で昆虫など小動物を捕食する。降河回遊魚と思われ、河川へは全長25mmくらいで遡上してくる。

【分布の概要】

伊豆諸島、相模湾以南の本州・四国・九州の太平洋沿岸、琉球列島; 中・西部太平洋

【伊豆諸島における生息環境】

青ヶ島から目録的に報告されているが、それを含めて伊豆諸島からは標本や信頼できる同定に基づく記録はない。伊豆諸島には本種の生息に適した河川がないため、卵稚仔の黒潮輸送による偶発的な分散の可能性が高いが、詳細は不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川の護岸化による生息環境の消失、堰堤等河川横断構造物による溯上・降下阻害が考えられるため、河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

Allen, G. R., 1991; 川那部浩哉ら (編・監修), 2005.



© 鈴木寿之

(執筆: 瀬能宏)

チチブモドキ

Eleotris acanthopoma

スズキ目
カワアナゴ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

体長 12cm。腹鰭が左右に分離する。体は焦げ茶色だが、背中だけ黄褐色になることもある。テンジクカワアナゴに似るが、縦列鱗数がやや少なく、並べて比較すると本種の鱗は粗く見える。また、オカメハゼにも似るが、鰓蓋の上下の孔器列が後方で接しないことで識別できる。河川汽水域から淡水域にかけて生息する。夜行性で、昼間は石の下や倒木の陰などに潜み、夜間、小動物を捕食する。両側回遊魚で、ふ化仔魚は海へ流下する。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、千葉県以南の本州・四国・九州の太平洋沿岸、琉球列島；中・西部太平洋

【伊豆諸島における生息環境】

本種は汽水域を中心とした河川感潮域に生息する種であるが、八丈島では淡水が湧出する礫底の海岸に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河口付近の河川改修や河川の護岸化による生息環境の消失、堰堤など河川横断構造物による遡上・流下阻害が考えられるため、河川から沿岸にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏 (監修), 2004; 中坊徹次 (編), 2013.

(執筆者: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

ミミズハゼ

Luciogobius guttatus

スズキ目
ハゼ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

体長 6cm。体は著しく細長く、背鰭は 1 基で、臀鰭と相対する。小さな腹鰭がある。胸鰭の基底上端に 1 本の遊離軟条がある。体色は全体的に濃い黄色あるいはオリーブ色で、小さな淡色の斑点が多数ある。多数の近似種や未記載種が知られ、識別は難しい。河口付近の転石下や礫間に生息する。両側回遊魚で、ふ化仔魚は海へ流下する。

【分布の概要】

伊豆諸島。北海道から九州に分布することは確実だが、その他の地域は海外も含めて詳細は不明である。

【伊豆諸島における生息環境】

大島、三宅島、八丈島、青ヶ島から目録的に報告されているが、標本や信頼できる同定に基づく記録はない。河口付近の汽水域に生息していると思われる。本属魚類には多数の未記載種が知られており、分類学的な検討も必要である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河口付近の河川改修による生息環境の消失が考えられるため、河口から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏 (監修), 2004; 中坊徹次 (編), 2013.

(執筆者: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供 (瀬能 宏撮影)

ボウズハゼ

Sicyopterus japonicus

スズキ目
ハゼ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

体長 15cm。尾鰭の上下に黒色縦線がないこと、体側前半の横帯は前に、後半の横帯は後ろに傾くことが特徴。河川中流域や渓流域に生息する。流れの速い場所を好み、岩盤や転石上で付着藻類を削り取って食べる。両側回遊魚で、和歌山県での産卵期は 7～9 月 (水温 20～26℃) で年 1 回産卵する。ふ化仔魚は 280 日前後の海洋生活を送った後、再び河川へ遡上する。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、福島・兵庫以南の本州、四国、九州、琉球列島；台湾

【伊豆諸島における生息環境】

標本や写真に基づく確実な記録地は、御蔵島の平清水川と八丈島だけである。2010 年 7 月に実施した御蔵島調査では、大島分川の河口の滝壺では生息を確認できなかったほか、過去に記録がある平清水川では調査を実施できなかった。伊豆諸島に分布することは確実であるが、調査不足のため詳細は不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川の護岸化による生息環境の消失、堰堤など河川横断構造物による遡上・流下阻害が考えられるため、河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏 (監修), 2004; 松浦啓一, 2012.

(執筆者: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供
(瀬能 宏撮影)

カエルハゼ

Sicyopus leprurus

スズキ目
ハゼ科

伊豆諸島

DD

環境省

CR

【形態・生態】

体長 5cm。体は細長く、頭部はやや縦扁する。体色はにぶい黄色で半透明。吻前縁に細く明瞭な黒色線が 1 本あることが特徴。繁殖期の雌の腹部はオレンジ色。傾斜が強く、河口からすぐ渓流域になる小規模河川に生息する。流れが緩やかな淵の岩盤上や転石上で見られ、移動するときは中層を遊泳する。両側回遊魚で、ふ化仔魚は海へ流下する。

【分布の概要】

伊豆諸島、琉球列島；マリアナ諸島

【伊豆諸島における生息環境】

2010 年 7 月に実施した調査において、御蔵島大島分川河口の滝壺の岩盤上から稚魚 1 個体が得られた。これが本種の伊豆諸島初記録となる。同地は増水によるかく乱が著しいと思われ、偶発的な出現の可能性もあるが、調査不足のため詳細は不明である。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川の護岸化による生息環境の消失、堰堤など河川横断構造物による遡上・流下阻害が考えられるため、河川から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

瀬能宏 (監修), 2004; 中坊徹次 (編), 2013.

(執筆: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供 (瀬能 宏撮影)

クサフグ

Takifugu niphobles

フグ目
フグ科

伊豆諸島

DD

環境省

【形態・生態】

体長 11cm。体背面が緑色で、瞳孔よりも小さい白色斑点が散在すること、胸鰭上方の体側と背鰭基底付近の背部に白い縁取りのない黒色斑があること、尾鰭後半が黄色いことなどが特徴。内湾の岩礁域や砂礫底、藻場、河口域に生息し、砂に体を埋めて休息する習性がある。小動物を食べる。産卵期は初夏で、新月と満月の直後に湧水のある砂利浜の岸边に集団で押し寄せて産卵する。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道から九州までの各地沿岸、東シナ海、琉球列島；朝鮮半島南部

【伊豆諸島における生息環境】

八丈島から確実な写真記録がある。神津島、新島、三宅島から目的的に報告されているが、標本や信頼できる同定に基づく記録はない。河口付近から沿岸にかけて生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河口付近の河川改修による生息環境の消失が考えられるため、河口から沿岸域にかけての連続的な環境保全が必要である。

【関連文献】

岡村収・尼岡邦夫 (編・監修), 2005; 中坊徹次 (編), 2013.

(執筆: 瀬能宏)



© 木村清志

アオザメ

Isurus oxyrinchus

ネズミザメ目
ネズミザメ科

伊豆諸島

*

環境省

【形態・生態】

全長 3.96m。体は流線形で、吻は円錐状にとがる。尾柄は縦扁し、隆起縁はよく発達する。尾鰭は三日月形で、上葉、下葉の長さがほぼ同じ。非常に行動的で、沿岸から外洋にまで生息し、表層から水深 500m まで出現する。通常は小型の魚類を捕食するが、大型個体は自身のサイズに近いメカジキを襲うこともあるという。胎生で、胎仔は子宮内で無精卵を食べて育ち、通常は 10 ~ 18 個体の仔魚が出産される。

【分布の概要】

伊豆諸島、北海道以南の本州、四国、九州、琉球列島；全世界の暖海

【伊豆諸島における生息環境】

沿岸に広く生息すると考えられる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁業や駆除事業による漁獲圧、遊漁による釣獲圧が懸念されるため、生息数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 2001; Pepperell, J., 2010.

(執筆: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供 (瀬能 宏撮影)

ニタリ

Alopias pelagicus

ネズミザメ目
オナガザメ科

伊豆諸島 *

環境省

【形態・生態】

全長 3.65m。オナガザメ科のサメは尾鰭上葉が著しく長いことが特徴。後頭部を横断する溝がない。マオナガに似るが、胸鰭上方に達する白色域がないことで識別できる。外洋表層性だが、沿岸の急深な岩礁にもしばしば現れる。魚類やイカを長い尾鰭を鞭のように使ってたたきつけて食べる。胎生で、胎子は子宮内で無精卵を食べて育ち、2 個体の仔魚だけが出産される。

【分布の概要】

伊豆諸島、青森・富山湾以南の本州・四国・九州の太平洋沿岸、琉球列島；インド洋と太平洋全域の暖海（熱帯域に多い）

【伊豆諸島における生息環境】

沿岸に広く生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁業や駆除事業による漁獲圧、遊漁による釣獲圧が懸念されるため、生息数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 2001; Pepperell, J., 2010.

(執筆: 瀬能宏)



神奈川県立生命の星・地球博物館提供（瀬能 宏撮影）

ハチワレ

Alopias superciliosus

ネズミザメ目
オナガザメ科

伊豆諸島 *

環境省

【形態・生態】

全長 4.61m。後頭部を横断する溝があることでニタリやマオナガから容易に識別できる。外洋表層から浅海、さらには海底付近まで幅広く生息する。様々な種類の魚類やイカを長い尾鰭を下方から鞭のように使ってたたきつけて食べると思われる。胎生で、胎子は子宮内で無精卵を食べて育ち、2 個体（ときに 3～4 個体）の仔魚だけが出産される。

【分布の概要】

伊豆諸島、相模湾以南の本州・四国・九州の太平洋沿岸、琉球列島；全世界の暖海

【伊豆諸島における生息環境】

沿岸に広く生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁業や駆除事業による漁獲圧、遊漁による釣獲圧が懸念されるため、生息数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 2001; Pepperell, J., 2010.

(執筆: 瀬能宏)



ヨゴレ

Carcharhinus longimanus

メジロザメ目
メジロザメ科

伊豆諸島 *

環境省

【形態・生態】

全長 3.5～3.95m（通常は 3m 以下）。胸鰭と第 1 背鰭は大きく、それぞれの先端が円く白いことで同定は容易。外洋の表層に生息するが、沿岸にも現れる。外洋性の魚類や頭足類のほか、海鳥やウミガメなども捕食する。胎生で、1～15 個体の仔魚を産する。

【分布の概要】

伊豆諸島、琉球列島；全世界の暖海

【伊豆諸島における生息環境】

沿岸に広く生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁業や駆除事業による漁獲圧、遊漁による釣獲圧が懸念されるため、生息数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 2001; Pepperell, J., 2010.

(執筆: 瀬能宏)



©(一財)沖縄美ら島財団

ドタバカ

Carcharhinus obscurus

メジロザメ目
メジロザメ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長 4.2m。背中線隆起があること、各鰭に特徴的な斑紋や縁取りがないこと、第1背鰭は低く、起点は胸鰭内角の上にあること、上顎前方の歯の基部は幅広いことが特徴だが、近似種のガラパゴスザメとの識別は難しい。沿岸から沖合にかけて生息し、強い回遊性を示す。幼魚は浅い場所にいるが、成魚は水深200～400mで多くみられる。主に魚類を捕食する。胎生で、沿岸浅所で出産する。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、房総半島以南の本州、九州、琉球列島；全世界の暖海

【伊豆諸島における生息環境】

沿岸に広く生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁業や駆除事業による漁獲圧、遊漁による釣獲圧が懸念されるため、生息数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 1984; Voigt, M. & D. Weber., 2011.

(執筆者：瀬能宏)



© 木村清志

メジロザメ

Carcharhinus plumbeus

メジロザメ目
メジロザメ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長 3m。背中線隆起があること、各鰭に特徴的な斑紋や縁取りがないこと、第1背鰭は高く、起点は胸鰭基底上にあることで識別される。沿岸から沖合にかけて生息する。普通は水深20～65mに見られるが、水深280mまでの海底付近を泳ぐこともある。主に底生魚類を捕食する。胎生。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、北海道、本州、四国、九州、琉球列島；全世界の暖海

【伊豆諸島における生息環境】

沿岸に広く生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁業や駆除事業による漁獲圧、遊漁による釣獲圧が懸念されるため、生息数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 1984; Voigt, M. & D. Weber., 2011.

(執筆者：瀬能宏)



© マリンワールド海の中道

アカシュモクザメ

Sphyrna lewini

メジロザメ目
シュモクザメ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長 4.2m。シュモクザメ科は金槌のような頭部が特徴。頭部前縁は円みを帯び、中央に凹みがあることで近似種から識別できる。遊泳性で、沿岸あるいはやや沖合の表層に生息するが、少なくとも水深275mまで出現する。幼魚は岸近くにいる。大きな群れをつくり、魚類のほか、様々な無脊椎動物を捕食する。胎生で、雄は全長1.4～1.6m、雌は2.0～2.2mで成熟し、湾内に移動して出産する。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、新潟・青森以南の本州、四国、九州、琉球列島；全世界の暖海

【伊豆諸島における生息環境】

沿岸に広く生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁業や駆除事業による漁獲圧、遊漁による釣獲圧が懸念されるため、生息数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 1984; Voigt, M. & D. Weber., 2011.

(執筆者：瀬能宏)



© 鈴木寿之

シロシュモクザメ

Sphyrna zygaena

メジロザメ目
シュモクザメ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

全長 4m。頭部前縁は円みを帯び、吻の前縁に凹みがないことで近似種から識別できる。遊泳性で、沿岸からやや沖合の水深 20m までの表層に生息する。幼魚は大きな群れをつくる。魚類のほか、甲殻類や頭足類などを捕食する。胎生で、雄は全長 2.5m、雌は 2.65m で成熟する。

【分布の概要】

小笠原諸島、伊豆諸島、北海道、本州、四国、九州、琉球列島；全世界の暖海（熱帯域には少ない）

【伊豆諸島における生息環境】

沿岸に広く生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

漁業や駆除事業による漁獲圧、遊漁による釣獲圧が懸念されるため、生息数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Compagno, L. J. V., 1984; Last, P. R. & J. D. Stevens., 2009.



神奈川県立生命の星・地球博物館提供（瀬能 宏撮影）

（執筆：瀬能宏）

マダラエイ

Taeniura meyeni

エイ目
アカエイ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

体盤幅 1.8m。体盤は円形に近く、背面に黒や焦げ茶色のまだら模様があること、尾部の腹中線上に皮褶（ひしゅう）があり、後端は尾端に達することが特徴。沿岸の岩礁やサンゴ礁に生息する底生魚で、固い底質を好む。魚類を食べていたとの報告があるが、甲殻類や軟体動物など底生動物を幅広く食べると考えられる。胎生で、雄は体盤幅が 1.0 ~ 1.1m で成熟する。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、本州（静岡、和歌山）、四国、九州、琉球列島；ミクロネシア、インド洋、西太平洋、ガラパゴス

【伊豆諸島における生息環境】

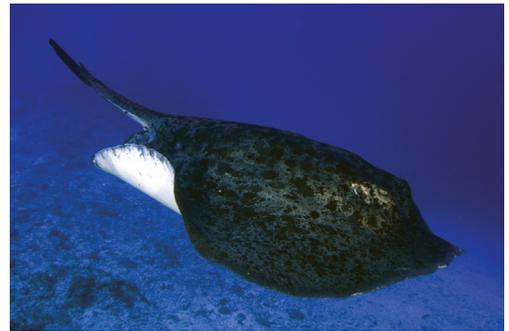
複数地点の岩礁で確認されており、沿岸に広く生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本来個体数が少ない種と考えられる。漁獲圧や釣獲圧が懸念されるため、生息数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Randall, J. E., 2005; Last, P. R. & J. D. Stevens., 2009.



（執筆：瀬能宏）

クエ

Epinephelus bruneus

スズキ目
ハタ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

体長 115cm。体は側扁し、体高は低い。体側に濃い茶色と、白またはオリーブ色の帯が交互にある。濃い茶色の帯は 6 本で、最初のものは眼を通る。大型個体ではこれら帯が消失し、鰭を含めて全体がオリーブ色になる。沿岸の浅い場所から水深 200m までの岩礁域や砂泥底に生息する。魚類や甲殻類を捕食する。産卵期は 5 ~ 7 月。雌性先熟型の性転換を行う。

【分布の概要】

伊豆諸島、本州、四国、九州、東シナ海、琉球列島；朝鮮半島からトンキン湾、海南島、台湾

【伊豆諸島における生息環境】

八丈島で成魚の撮影記録があり、沿岸岩礁域に広く生息していると思われる。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

本来個体数が少ない種と考えられる。成魚は市場価値が著しく高く、遊漁の対象でもあることから、常に高い漁獲圧や釣獲圧にさらされている。生息数を把握し、適正な資源管理が必要である。

【関連文献】

Randall, J. E. & P. C. Heemstra., 1991; Heemstra, P. C. & J. E. Randall, 1993; 山田梅芳ら, 2007.



神奈川県立生命の星・地球博物館提供（瀬能 宏撮影）

（執筆：瀬能宏）

ユウゼン

Chaetodon daedalma

スズキ目

チョウチョウウオ科

伊豆諸島



環境省

【形態・生態】

体長 15cm。鱗や体の地色は黒く、各鱗の中央あるいは前縁が白いため、黒い網目模様になる。体側中央に1白色横帯、背鰭、臀鰭の軟条部と尾鰭に黄色い縁取りがある。沿岸浅所のサンゴ礁や岩礁に生息し、大きな群れをつくる。小動物や藻類を食べる。繁殖に関する生態は不明である。

【分布の概要】

伊豆諸島、小笠原諸島、本州(相模湾、紀伊半島)、四国(高知)、沖縄諸島、南大東島

【伊豆諸島における生息環境】

沿岸浅所の岩礁に生息する。

【伊豆諸島における生存に対する脅威や保全上の留意点】

分布域の中心は伊豆諸島、小笠原諸島であり、同地域の準固有種的な存在でもある。観賞魚としての市場価値が高く、飼育を目的とした乱獲が懸念される。

【関連文献】

Kuiter, R. H., 2002; 岡村収・尼岡邦夫(編・監修), 2005.



© 山田鉄也

(執筆者: 瀬能宏)

【種名・学名などの準拠文献】

目と科の配列、種の学名、標準和名は次の文献に従い、科内の種名の配列は学名のアルファベット順とした。

中坊徹次(編), 2013. 日本産魚類検索: 全種の同定 第三版. 東海大学出版会. 1748 pp.

【留意種とした理由】 レッドリスト改定時における評価の根拠など補足情報

和名	備考
アオザメ	これらの種は IUCN のレッドリストで VU 以上 (アカシュモクザメは EN、その他は VU) に指定されており、継続的な捕獲圧が懸念されることから、留意が必要である。
ニタリ	
ハチワレ	
ヨゴレ	
ドタブカ	
メジロザメ	
アカシュモクザメ	
シロシュモクザメ	
マダラエイ	
ユウゼン	

【関連文献】

Allen, G. R., 1991. Field guide to the freshwater fishes of New Guinea. Publication No. 9 of the Christensen Research Institute. 268 pp.

Compagno, L. J. V., 1984. FAO species catalogue Vol. 4. Sharks of the world. Part 2-Carcharhiniformes. FAO. x + 251-655 pp.

Compagno, L. J. V., 2001. Sharks of the world: An annotated and illustrated catalogue of shark species known to date. Vol. 2. FAO. viii + 269 pp.

Heemstra, P. C. & J. E. Randall, 1993. FAO species catalogue. Vol. 16. Groupers of the world. FAO. viii + 382 pp., 31 pls.

川那部浩哉・水野信彦・細谷和海(編・監修), 2005. 山溪カラー名鑑: 改訂版日本の淡水魚. 山と溪谷社. 719 pp.

Kuiter, R. H., 2002. Butterflyfishes, bannerfishes and their relatives. TMC Publishing. 208 pp.

黒木真理・塚本勝巳, 2011. 旅するウナギ: 1億年の時空をこえて. 東海大学出版会. v + 278 + iii pp.

Last, P. R. & J. D. Stevens, 2009. Sharks and rays of Australia. Second edition. CSIRO Publishing. ix + 644 pp.

Lourie, S. A., A. C. J. Vincent & H. J. Hall, 1999. Seahorses: An identification guide to the world's species and their conservation. Project Seahorse. x + 214 pp.

松浦啓一(編著), 2012. 黒潮の魚たち. 東海大学出版会. 221 pp.

村瀬敦宣・宮崎佑介・瀬能宏, 2012. 屋久島産標本に基づくヒラスズキ *Lateolabrax latus* の再記載と河川における生息状況. 魚類学雑誌, 59(1): 11-20.

中坊徹次(編), 2013. 日本産魚類検索: 全種の同定. 東海大学出版会. 1748 pp.

岡村収・尼岡邦夫(編・監修), 2005. 山溪カラー名鑑: 日本の海水魚. 第3版. 山と溪谷社. 783 pp.

Pepperell, J., 2010. Fishes of the open ocean: A natural history & illustrated guide. The University of Chicago Press. 266 pp.

Randall, J. E., 2005. Reef and shore fishes of the South Pacific. University of Hawai'i Press. xii + 707 pp.

Randall, J. E. & P. C. Heemstra, 1991. Revision of Indo-Pacific groupers (Perciformes: Serranidae: Epinephelinae), with descriptions of five new species. *Indo-Pacific Fishes*, (29): 1-332, pls. 1-41.

瀬能宏(監修), 2004. 決定版日本のハゼ. 平凡社. 534 pp.

下瀬環・名波敦・瀬能宏, 2011. 石垣島で水中撮影されたスズキ属魚類. 魚類学雑誌, 58(2): 211-213.

Voigt, M. & D. Weber, 2011. Field guide for sharks of the genus *Carcharhinus*. Verlag Dr. Friedrich Pfeil, München, 151 pp.

山田梅芳・時村宗春・堀川博史・中坊徹次, 2007. 東シナ海・黄海の魚類誌. 東海大学出版会. lxxiii + 1262 pp.